



第2章 『浪江町』に思いを寄せて

.....

浪江のこころプロジェクトの終了にあたって、これまで『浪江のこころ通信』等に掲載された皆様の中から、13組16名の方に改めて取材に応じていただき、その後の生活の変化や現在の想い、今後の展望といったお話を伺いました。

.....



福島県

山崎 安男さん(権現堂)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：2021年12月21日

動けるうちに活動の輪を広げたい



▲「視力が衰えてきたんだよ」とおっしゃっていましたが、森林ボランティアも大好きなゴルフにも意欲満々のようです

材を揃えたりするなど、会社の経営も大変でした。今後も浪江町津島地区をはじめ、双葉郡全体に避難指示解除区域が広がるのでし

東日本大震災・福島原発事故から1年後、2012（平成24）年夏に、川俣町の社屋で取材させていただいてから、ほぼ10年。あの時の記憶をお互いにたどりながらの再会インタビューになりました。

仕事のフィールドである山や川を本来の姿で守りたいという思いは、年を重ねて、なお募る一方のご様子です。

◆10年以上経った今の方が、震災にまつわる話をするのが難しい

大震災から約4カ月後に、伊達郡川俣町で(有)山崎興業を再開させました。あれから代表取締役を務めてきましたが、現在は息子に代を譲り、2021（令和3）年11月より会長職に就いています。

国有林での林業の仕事が元々の事業でしたが、震災以降は大きく変わりました。

避難によって荒れた家屋の植木の抜根や庭石、竹藪の除去、獣に荒らされた農地の整備など、個人や浪江町の仕事が多々あります。震災前に使っていた様々な重機は放射能汚染の懸念によって修理もままならず調達し直したり、新たな作業用の機

うから、我々の仕事もどうなっていくか気がかりです。

震災前から東京電力福島原子力発電所とは様々な関わりがありました。今の自宅は福島市だし、遠方に避難して戻れない人たちも多く、複雑になっているわけですから、原発事故や避難などの話をするのは以前よりも難しくなると感じています。

◆山や川の本来の力を取り戻したい

林業が発点だった私にとって、「山をどう守り、育てるか」が一番の関心事であり、伐採し、植林をして山を整えてきました。むやみに山を削ることはもちろんですが、地球温暖化の影響なのか、至るところで水害が頻繁に発生し、被害は大きくなる一方です。震災後に急増したソーラー発電のパネル設置は、土砂採取よりも課題が大きいと思っています。山が本来の保水力を失っていくことは、本当に嘆かわしいことです。

震災以前は山の整備につながる川の案内人などしていました。森林ボランティアの仲間は20数名いましたが、避難で遠方に行ったり、亡くなったたりして、中心メンバーは5名程度になっています。ですが、津島地区の

区長さん方や国有林で仕事をしていたOBなどに新たに声をかけて活動を続けたいですね。看板を作って山火事や不法投棄などの注意を呼びかけたり、ゴミ拾いをしたりしてきた活動を、是非とも浪江町でと願っています。そのために、役場には集めたゴミの処理方法を具体的に検討して欲しいと思っています。

◆自然を一緒に守るために、何か工夫を

活動に巻き込みたいのは、年金支給が始まる65才から、元気で動けそうな75才くらいまでの人たちなのですが、どうしたら関心を持っていただけれるかを考えています。

例えば、福島中央テレビで放映された「鈴木」ブンケン歩いてゴミ拾い旅」を見て、こうした番組と連携してお隣の川俣町山木屋地区や福島市立子山地区の区長さん方への呼びかけを広げてみようかと考えています。また、新聞などのメディアが環境保全に対する法的な規制緩和の呼びかけや、保全計画全体を俯瞰した提言などを積極的に報道してくださらないだろうかなど、多くの人たちの理解を効果的に深めてくれる支援も期待しています。



福島県

横山 和佳奈さん(請戸)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2021年12月28日大震災の記憶と体験を、
さまざまな視点で伝え続けたい▲お仕事も地域の活動も、思い切り楽しんでください（写真：原子力災害
伝承館ご提供）

横山さんへの最初の取材は、大学受験を目前にした高校3年生の時でした。

そして約5年後、社会人となった横山さんにお話を伺うことができました。大学時代や今の仕事に就いた経緯、ふるさと請戸地区に対する思いやこれからしてみたいことなど、あれこれとお聞かせいただきました。

◆社会人の第一歩は、

「東日本大震災・原子力災害
伝承館」から

東日本大震災・福島原発事故からの避難体験から、心のケアに活かせる心理学を学ぼうと進んだ大学では、授業やサークル活動を通じて、様々な学びや体験などができました。でも、新型コロナウイルス禍の影響で、卒業を控えた4年生の1年間、授業はもちろん、担当教授の卒論のサポートを受けることもままありませんでした。

また、大学に入学した頃から、県外のNPO法人さんと一緒に語り部ボランティアに取り組んだり、現在の職場である東日本大震災・原子力災害伝承館（以下、伝承館）が制作した証言映像に出演したりするうちに、心理学を専門的に探究するよりも、災害を様々な角度から

伝えていきたいという思いが強くなっていきました。

伝承館に就職できたのは本当に幸運でした。現在は事業課に所属し、主に語り部さん方のシフトを組んだり、訪問される団体さんへのプログラム手配や当日の誘導などに従事しています。

◆これからも伝え続けたい
「請戸の田植踊り」

請戸に生まれ育った私には、荻野神社の安波祭や田植踊りとても身近なものです。保存会が公民館で踊りを教えていて、小さい頃から参加していました。

新型コロナウイルスの影響で1年半ほど活動を休止していましたが、昨年10月に開館した「震災遺構浪江町立請戸小学校（以下、震災遺構請戸小）」の式典での公演から再開しています。震災直後から参加している踊り子は少なくなり、現在はこの伝統芸能に興味を持ってくれた方やNPO団体、まちづくり会社の方たちの協力を得て活動をしています。観客ばかりでなく、ずっと応援してくださっている様々な人たちにも会うことができるのが活動の醍醐味ですね。

しかし、踊り子の継承が気がかりです。10代の若者や、もっと年下の子どもたちに伝えていくためには、地元の学校などで伝える機会を創ることが必要だ

と感じています。

◆今やってみようことは、請戸小での同級会開催と、旅をすること

成人式を迎えた3年前、先立って1月3日に福島市で同級会を開いたら、学年19人中13人も来たんですよ。やっと再会の場ができたと思いました。同じ頃、同級生とオンラインで集まる企画をやってみたのですが、特定の人たちしか集まらなくて続きませんでした。また、昨年の震災遺構請戸小の開館式には4人の同級生が参加しましたが、特に実家を離れて県外にいる人たちは遺構になったことも知らないかもしれません。

だから、広く伝えて一堂に集まり、震災前の写真や請戸の模型を見ながら何気ない話を存分にしてみたいです。

新型コロナウイルスの影響で、大学の時には卒業旅行さえも行けずに残念な思いをしました。この間、伝承館の仕事で長崎県出張しました。駆け足でしたが、長崎の語り部さんたちとの交流や、まだ知らない日本の風景も楽しむことができました。近隣の伝承館巡りでもいいし、風景を眺めるのもいい。旅はいろいろなことを吸収できると思うので、出かけられる状況に早くなることを願っています。



福島県

伊藤 暢秀さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：2021年12月28日

まさかの「さか」は必ずある。 私たちの経験や教訓を、次の世代に伝えたい

福島市の借上げ住宅自治会の連合会「福島市なみえ会」が結成された頃、2012（平成24）年冬に取材して以来、約10年ぶりの再取材となりました。

広域避難を余儀なくされ、避難先で自治会の長を務められた伊藤さんに、改めて災害時の「つながり」についてお聞きしました。



▲「東日本大震災・福島原発事故は、いい経験をしました。これをどう伝えていくか思案中」とおっしゃる伊藤さん。間違なお話しぶりに、私たちも励まされます

◆団体を創ることで、町との対話を円滑に

あの震災・原発事故からの避難で福島市春日町のマンションに入居すると、そこには同級生が4人もいました。周辺にも浪江町から避難した人たちがいましたから、すぐに「福島市春日町借上げ住宅浪江会（以下、春日町）」をつくりました。

翌年（2012年）7月には、福島市内の3つの借上げ住宅自治会が集まって「福島市なみえ会」を立ち上げました。私は神輿に担がれたようなものですが、本当に心強かったですね。人と人のつながりが支えてくれました。

点-inしている自治会よりも、より人数がまとまった連合会を組織して、町と話を進めることが肝心と考えました。会員の親戚、友人知人などの消息が早く

知りたかったし、避難生活を送るうえでの要望などを叶えて欲しかったからです。「春日町」が約70名、「福島市中央浪江町自治会」が140名余、「福島市浪江自治会」が約50名、合わせて260名以上の大所帯でしたので、会ごとに要望をまとめました。一人ひとりが言いたいことを言うのではなく、役場に對しても組織として話をしました。

一番の成果は、「あつまっぺ交流館※」の開設でした。点-inして暮らす借上げ住宅住民にお借りしたりすることもありました。市街地に集まる拠点を持つことは大事だったと思います。互いに顔を合せておしゃべりすればホッとすると、家族以外の人と話ができることは大切ですよ。

私たちは、比較的早い時期に浪江町に近い南相馬市原町区に移転しましたので、会の人たちにお会いする機会は少なく、最近では新型コロナ禍の影響で訪ねることも難しいですが、お元気でいらっしやるようです。

※開設当初は福島市方木田にあり、現在は福島市渡利に移転

◆振り返ると楽しかった、南相馬市の暮らし

南相馬市原町区の家は昭和40年代後半に開発された団地の一角にあります。我が家の玄関と差向いになっている近隣の方々とは親しくさせていたいただきます。反面、隣組組長も務めました。回覧などはポスティングで、顔が分らないお宅もありました。団地は子どもたちを介してお付き合いが主になりやすから、高齢者はかりになると交流が少なくなるのは仕方ないでしょう。

私たちは、2022年には浪江町に帰ります。転居先で「浪江町民です」とはもう言いたくないし、少ない人数でも戻った方が賑わいの助けになるでしょう（笑）

大震災の時は金婚式でしたが、10年経って、老いることは大変だなあと感じます。身軽に動きたい思いとは裏腹に、気持ち億劫になることも知りました。その上、この2年、新型コロナ禍に追い打ちをかけられたようなものです。

けれども、避難の体験やみんなが助け合った経験などを年下の世代、できれば20、30代の若い人たちに伝えていきたいですね。浪江の家に気軽に立ち寄りいただければと願っています。



福島県

志賀 隆充さん(大堀)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2022年1月7日

かつて誰も経験したことのない「消防行政」の取り組みは、まだまだ終わりません



▲お仕事中は引き締まったお顔でしようから、記事には柔らかな表情の写真を選びました。大変なお仕事です。くれぐれもお身体おいとください

志賀さんには、東日本大震災・原発事故から間もない2012（平成24）年に、避難先の本宮市で避難にまつわるお話をお聞きしました。今回の再取材では、消防士のお立場から、この10年頻発した自然災害などを通じた体験や、日常生活や心身を脅かすような災害から身を守る術など、お仕事にまつわるお話を中心にお聞きしました。

◆お住いの市町村のハザードマップ、ご覧になっていますか
思い出すのは、2019年の台風19号がもたらした水害です。私たち家族は、東日本大震災で本宮市に避難し、3年前に本宮市内に家を購入しました。本宮市のハザードマップを調べると、立地条件に少し不安はありましたが、排水ポンプの備えなどを考慮し、入居しました。しかし、台風19号によって河川が氾濫し、屋外は170cm、屋内は100cmほど浸水してしまいました。その後、避難のために3、4カ月間、恵向応急仮設住宅で仮住まいをしなければなりませんでした。

その災害が起きた時、私は休日でしたが、勤務先に駆けつけ対応にあたりました。家族には、風雨が強くなる前

に車を高台に移動させ、ハザードマップで予測される浸水は家の1階で留まるはずだから、2階で生活し、避難指示が出た場合は安全な高台に避難するようにと伝えました。

皆さんもお住いの市町村が作成しているハザードマップで、ご自宅と職場、この2カ所に關して洪水や津波、土砂災害、火山などの様々な災害がもたらす被害予測や状況、避難場所などを日頃から調べておくことをお願いします。

今は携帯電話やパソコンなどで簡単に調べられることもできるので、台風などの場合は、安全なうちに近くの河川がどのような状態になっているのかをネット上で確認して、避難などの対応を判断してください。

災害を最小限に防ぐために何より大切なのは、自治体が発する警報などを待つのではなく、自ら情報を取りに行くことです。それから、日頃からよく見るサイトを決めておくことです。私は「川の防災」などをよくチェックしていますよ。

◆避難された皆さんが安心して帰れる双葉郡を目指して

私が勤務する双葉地方広域市町村圏組合消防本部（以下、双葉地方消防本部）の業務エリア

は広く、双葉8町村ばかりでなく、双葉町の方々が住む郡山市日和田の仮設住宅への戸別訪問も行っています。特に冬期は、暖房器具による火災や入浴時や洗面所でのヒートショックの備えや、新型コロナウイルスの備えなどに力を入れてお伝えしています。私たちが訪ねると本当に喜んでくださり、逆に元気をいただいています。

そのほかにも、東日本大震災・原発事故の災害現場での体験や教訓、10年以上にわたる双葉地方消防本部の災害対応などを、講習会などを通して多くの方々に伝えていきます。

震災以前に私たち家族が住んでいた大堀地区や津島地区、双葉郡のほかの町村にも帰還困難区域があります。2017年春に浪江町で起きた大規模な山林火災の消火活動など、誰もいないふるさとを守り続けています。全国、いや世界中の誰も経験したことのない消防行政を常に模索しながら、避難指示が解除された時に皆さんが安心して帰っていただけのように、これからも地域を守っていきたく思います。



福島県

今野 秀則さん(下津島)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：2022年1月11日

記録誌作りには、お会いしてお話を聞ける 嬉しさがありました



▲大玉村のご自宅玄関で。「地域そのものを消されたようで、本当に悔しい」と何度も話され、その無念さが胸に迫りました

今野さんが執筆し、(社福)福島県社会福祉協議会が2014(平成26)年3月に発行した『3.11ある被災地の記録 浪江町津島地区のこれまで、あのとき、そしてこれから』は、東日本大震災・福島原発事故によって全戸避難を余儀なくされた津島地区住民の声などを収録し、記録誌の先駆けとなった一冊です。

改めて、「ふるさとの記憶を記録した頃」を振り返っていただくとともに、5カ所目の避難先である大玉村での暮らしについてもお聞きしました。

◆「津島が消えてしまう」という切実な思いがありましたね
大震災当時は、(社福)福島県社会福祉協議会(以下、県社協)に勤めていました。その年の5月にいったん職場を離れましたが、その後、大震災・原発事故における県社協の活動をまとめた『東日本大震災 福島県社会福祉協議会活動の記録』に携わりました。

その仕事を終えた時、「退職して、津島地区の記録を遺したい」と決めていました。避難によって散り散りになってしまった津島地区の先人の経験や知識、地域の歴史や暮らしなどを今、まとめておかなければ。手をこまねいていては、故郷の記憶が消えてしまうと思ったからです。それがきっかけとなり、県社協が平成25年度事業として採り上げてくれたので、2013年4月から1年間をかけてまとめました。

大震災以前から、勤めの傍ら、下津島行政区の区長を務めており、地区のミニコミ紙『I LOVE 下津島』を発行していました。下津島地区の故事来歴、先輩方や地区で活躍する人たちへのインタビュー、語り継がれている民話や昔話などをシリーズで掲載して、取り組んだ経験が礎になりました。

『3.11ある被災地の記録』では、津島の7地区の高齢者16人に生い立ちから避難までをお聞きしました。津島の自然や歴史、暮らし、文化などにも話が波及し、新しい発見もあって、避難している最中でしたが本当に楽しい作業でした。県内外の避難先への訪問回数は平均2、3回。多い方で4、6回に及びました。

それにつけても、未曾有の原発事故によって地域社会の全てが消滅するような避難を強いるのですから、国は率先して被災者の話を聞き、地域の歴史はないかと思うのです。

役員を務める福島原発事故津島被害者原告団の活動が落ち着いたら、震災前に考えていたことですが、できれば旧津島村役場の記録や地区の故事来歴を調

べて、旧津島村の記録をまとめたいと思ったりしています。

◆この2年、新型コロナ禍で顔を合わせる機会がますます減りました。

仲立ちをしてくださる方がいて、安達郡大玉村に家を建て、2016(平成28)年暮れに引っ越しました。

それまで5年間住んでいた本宮市白沢の和田地区(以下、白沢)は、気候風土が津島と似ており、人情が厚い土地柄で気に入っていたのですが、やむを得ない事情があり、転居しました。

白沢は津島よりも古い風習を遺っていて、地区ごとに「どんと焼」や「山の神講」、「さなぶり」など年中行事を行います。白沢に越してきた時には、隣組の皆さんが歓迎会を開いてくださって、その後、地区の行事に参加し、6軒の隣組の方々とはすっかり顔なじみになっていました。

白沢も大玉村もそうですが、孤立して暮らすことはできません。地域に溶け込むことで、温かく受け入れていただけるものと思っています。しかし、この2年は新型コロナ禍で、役員を務める地元の大玉村十三区老人クラブや、南達地方※に避難した浪江町民で結成するコスモス南達会も実施できなくて、寂しい思いをしています。

※安達郡大玉村や南に隣り合う本宮市など一定の地域を差す呼称です

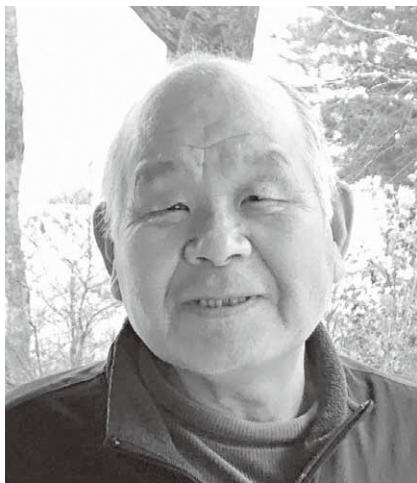


福島県

今野 義人さん(赤宇木)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2022年1月11日

あこうぎ 赤宇木の子どもたちが、その子どもたちに 伝えられる記録を遺すために



▲取材させていただいた私たちも、記録誌を拝見することを楽しみにしています。本当に頭の下がる取り組みをお聞かせいただきました

2014（平成25）年春に着想し、協力者の方々と共に足かけ約7年を費やした赤宇木地区の記録誌『百年後の子孫（子ども）たちへ』は現在、印刷に入っています。そして、今年春頃に開催を予定している地区総会で配布するとのことでした。

赤宇木地区区長として、ふるさとの様々な記憶を記録する取り組みに掛けた思いや、制作の道のりを振り返っていただきました。

◆赤宇木地区を余すところなく、子どもたちに伝えたい

東日本大震災・原発事故から半年後、津島地区住民が集められ、開かれた国の説明会で、「このまま何もしなければ100年は帰れないと思います」という担当者の言葉を聞きました。このことがきっかけとなり、赤宇木地区の記録をなんとしても遺したい、子どもたちに伝えなければならぬと決心しました。

最初に取り組んだことは、80歳以上の住民の方々に、家族の歴史や思い出を書いていただけるようお願いをしました。返信のない方々には、避難先を訪ね聞き取りをしながら、それぞれのお話をまとめました。古い写真などもぜひお貸しいただきました。

そのほか、赤宇木地区の歴史や言い伝え、民話や方言、先祖

から受け継がれてきた慣習や生活の様子などを収録し、地区に特化した記録誌を作ろうと考えていました。

しかし、旧津島村には7つの地区があつて、お互いに重なり合った地域の取り組みを綿々と続けてきたことを考えると、そういった取り組みや旧村役場のことなども加えるべきだと思えました。

こうした幾つかの柱を整理した上で原稿を作ることになりましたが、私はパソコンが苦手でしたので、こうしたことに詳しい今野邦彦さんに協力を求めました。今野さんは二本松市の仮設住宅を退去後、伊達郡桑折町に転居しましたので、私が桑折町まで足しげく通っていました。

また、赤宇木地区の四季の風景写真などを誌面に収録するために、私や今野さんを含めた7人で写真撮影も行いました。こうして制作した記録誌は、最終的に約500ページになりました。

地区住民の中で、原稿を書いてくださった人たちが10数人。残りの約60数人には取材をさせてもらいました。各家庭を廻り、両親に取材をしていると、子どもたちが一緒に聞いてくれる。地区や先祖のことを尋ねてくれる。これは嬉しかったです

ね。始めてよかったと勇気ももらいました。

◆「遺す」とへの飽くなき思い
現在、赤宇木地区は80世帯、約240人です。残念なことに、避難しているこの10年の間に47、8人が亡くなっています。もちろん、その中には取材した方もいらつしやいます。

記録誌の制作中に、肩を痛めたり、腰の具合が悪くしたりして治療しなければならなかった期間が二度あつて、計画した5年より2年延びましたが、今年度中に総会などで配ることができそうです。欠席された方々は、直接訪問して日頃の様子を伺いながら手渡しをしたいと思っています。

原発事故発生以来、継続してきた有志による放射線量測定と、この記録誌の制作は赤宇木地区の事業として取り組んできましたが、ある程度の区切りがつきそうですので、今期で区長を辞したいと思っています。

これからしてみたいと思つていることは、写真集づくりです。記録誌のために、赤宇木地区役員会の協力で1,000点を超える写真を撮りました。これをお蔵入りさせるのはもったいない。できることなら、これらを一冊の本にまとめたいと思っています。



大阪府

志賀 伸子さん(川添)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：2022年1月15日

心温かだった時代を振り返りながら

2021年秋、志賀さんは、絵本「長いおるすばん」(2019年9月 浪江のころ通信第99号掲載)に続き2冊目の絵本「カミナリおじさん」を出版されました。昔を振り返り幼い自分を投影させたとおっしゃるその作品の根底には、互いを受け入れ支え合って生活していた人々の温かさがあります。取材時の志賀さんの言葉一つ一つから、懐かしむことはできても再び味わうことのできない時代への思いと、震災前の姿には戻ることのできない故郷への思いとが、重なって感じられました。



▲「幅広い年代の方に読んでいただきたい」と、著書を手にとられる志賀さん

◆ふるさと浪江への思い
避難生活10年。その間、ぼんやり過ごしたくないと頑張ってきましたが、80代に突入した身は、気力と体力が伴わず。浪江の家には4年前に出かけたきりで、その後コロナ騒ぎとなり、その機会は遠のくばかりです。戦後を必死で生き、浪江を安住の地と定め、終の住処と信じていたのに…今では自宅は廃屋同然、精魂込めた庭木は放射能汚染の理由で根元から伐られ、草茫々の荒地と化しています。一度は知人の好意で草を刈り取ってもらいましたが、その後も雑草との戦いは続き、その都度、知人の恩情に頼る心苦しさはつのるばかり。この先、どうしたらよいものかと悩みは尽きず…これもあれも原発事故さえなかったらと、無念でなり

ません。
先日、テレビで、未だに「帰還困難」にある津島の現状を見て、かつての教え子たちの顔が浮かびました。「今、どこで、どうしているのかしら」と。続いて、浪江中学校の生徒たちの顔も。もう各々、父・母となり、孫も…という年齢になっていくでしょう。でも、私の頭の中では、いまま坊主頭やオカッパの姿で走り回っています。日照りの夏も凍える冬も通った校舎の姿、青い空に響いた校歌：何一つ忘れることはありません。ですが、その思い出の学校は解体され、校名も校歌も新しく変わると知りました。時代の流れとともに、仕方がないことかも知れませんが、故郷がどんな遠くなってもいくように感じられます。

◆出版への思い
今回出版した「カミナリおじさん」は、今から70余年も昔、戦後の、誰もが貧しく娯楽らしいものなどなかった時代の話です。当時、街角には、戦地で負傷した兵隊さん(傷病兵)がおり、紙芝居で生計を立てている方も少なくなかったのです。当時の子どもの遊びはと言えば「鬼ごっこ」や「かくれんぼ」。テレビも映画も身近にはありません。おじさんの語りと共に一枚一枚めくられる絵を見ながら、その物語の世界に入り込み、主人公と一体になったり、空想したりと、ワクワク胸躍らせたものです。今の時代の子どもたちには想像できないかも知れませんが、「こんな時代もあったんだ」と知ることは、無駄ではないと思います。あの時代を生き私たちがいなくなったら、もう忘れ去られるでしょう。だから、書き留めておきたいと思ったのです。同年代の方々から「懐かしい」「思い出話に花が咲いたわよ」との声を、そして、学校での「読み聞かせ」で知ったという子どもたちからは感想文が届きました。その中には「水あめ」についての感想が多くありました。おいしいお菓子が自由に手に入る時代になったのに、よほど珍しかったのでしょうか。昭和は遠くなりましたね。



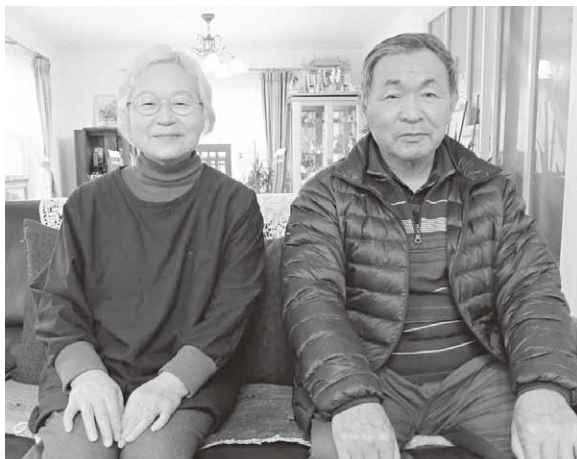
山形県

岡田 有一さん・貞子さん(大堀)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 村田・吉田

取材日：2022年1月21日

コロナがおさまったら、またみんなで集まりたい



▲山形市内のご自宅で

浪江のころ通信第21号（2013年3月）と第69号（2017年3月）に登場いただいた岡田さんご夫妻。有一さんは、山形市周辺にお住まいの浪江の方の集まり「山形浪江コスモス会」の会長をされています。今は新型コロナウイルス感染症の影響で集まりができませんが、落ち着いたらすぐにでも再開したい、と話されていました。

毎回、午前中から集まって午後3時くらいまでずっと話をしています。皆さんけっこう沢

山持ってくるので食べきれないくらいでした。貞子さん 話題は「これどうやって作ったの」から始まり、体調や健康にいい体操のことなど。浪江の情報や賠償のことは話しましたが、家の話や子ども

◆山形浪江コスモス会について
有一さん 会を作ったのは、2015年の春だったと思います。当時、浪江町復興支援員だった佐藤眞敏さんが支援員を辞めるタイミングでした。浪江の方々はこの大変なのに、助け合う相手や話し相手がいないと大変だろうということで、山形市内の浪江の方で会を作りました。段取りはすべて佐藤さんにやってもらい、会長はやってくれと言われて私が引き受けました。
コロナ前は、皆で手作りのものを持ち寄ってお茶飲みする会を、2か月に1回開催していました。曜日の固定などはなく、佐藤さんとうちで手分けして電話し、皆さんの予定を聞いて都合が合う日にしていました。はじめは私の自宅で行っていましたが、皆さんが「悪い、気を遣う」というので、公民館を借りるようになりました。会費は500円ですが、前回の余りがあるので、徴収しないなど、皆さんの負担にならないようにしていました。

◆最近の生活について
貞子さん これまではなんとか生活しようとして必死にやってきました。これからのことはまだあまり考えられませんね。いろいろな所に行きましたが、東北はやはり雰囲気が良いです。

山持ってくるので食べきれないくらいでした。貞子さん 話題は「これどうやって作ったの」から始まり、体調や健康にいい体操のことなど。浪江の情報や賠償のことは話しましたが、家の話や子どももあるかもしれないということもあつた。子どとも住んでい

◆山形浪江コスモス会について
有一さん 会を作ったのは、2015年の春だったと思います。当時、浪江町復興支援員だった佐藤眞敏さんが支援員を辞めるタイミングでした。浪江の方々はこの大変なのに、助け合う相手や話し相手がいないと大変だろうということで、山形市内の浪江の方で会を作りました。段取りはすべて佐藤さんにやってもらい、会長はやってくれと言われて私が引き受けました。
コロナ前は、皆で手作りのものを持ち寄ってお茶飲みする会を、2か月に1回開催していました。曜日の固定などはなく、佐藤さんとうちで手分けして電話し、皆さんの予定を聞いて都合が合う日にしていました。はじめは私の自宅で行っていましたが、皆さんが「悪い、気を遣う」というので、公民館を借りるようになりました。会費は500円ですが、前回の余りがあるので、徴収しないなど、皆さんの負担にならないようにしていました。

◆山形浪江コスモス会について
有一さん 同じ大堀の人に連絡したところ、地元なら野菜を作ったり、近くの人の付き合

山持ってくるので食べきれないくらいでした。貞子さん 話題は「これどうやって作ったの」から始まり、体調や健康にいい体操のことなど。浪江の情報や賠償のことは話しましたが、家の話や子どももあるかもしれないということもあつた。子どとも住んでい

◆山形浪江コスモス会について
有一さん 会を作ったのは、2015年の春だったと思います。当時、浪江町復興支援員だった佐藤眞敏さんが支援員を辞めるタイミングでした。浪江の方々はこの大変なのに、助け合う相手や話し相手がいないと大変だろうということで、山形市内の浪江の方で会を作りました。段取りはすべて佐藤さんにやってもらい、会長はやってくれと言われて私が引き受けました。
コロナ前は、皆で手作りのものを持ち寄ってお茶飲みする会を、2か月に1回開催していました。曜日の固定などはなく、佐藤さんとうちで手分けして電話し、皆さんの予定を聞いて都合が合う日にしていました。はじめは私の自宅で行っていましたが、皆さんが「悪い、気を遣う」というので、公民館を借りるようになりました。会費は500円ですが、前回の余りがあるので、徴収しないなど、皆さんの負担にならないようにしていました。



群馬県

長竹 麻弘さん(川添)

取材者：高崎経済大学 櫻井

取材日：2022年2月28日

浪江小の頃からの目標を実現し、充実した日々



長竹麻弘さんの取材は、2011年7月（第1回）、2013年8月（第2回）に続き3回目となる。幼い頃からの目標であった鉄道関連の会社に就職して4年。大変なことも多いが、充実した日々とのこと。ここまでの歩みや近況を、とても気さくに明るい雰囲気でお話しいただいた。

震災後に避難した群馬県伊勢崎市で生活して11年になります。現在は、東武鉄道の系列会社で駅務員として働いています。毎日、自宅から電車で栃木県内の勤務する駅に通勤しています。鉄道の会社で働くことは、浪江小時代からの目標でした。群馬の中学校を卒業後、希望していた都内にある鉄道高等学校で学び、そして今の会社に就職して4年になります。高校では、片道2時間30分の電車通学でしたが、剣道部で副部長として頑張ることができましたし、各地から通う仲間とともに充実した時間でした。

震災後は避難した群馬県伊勢崎市で生活して11年になります。現在は、東武鉄道の系列会社で駅務員として働いています。毎日、自宅から電車で栃木県内の勤務する駅に通勤しています。鉄道の会社で働くことは、浪江小時代からの目標でした。群馬の中学校を卒業後、希望していた都内にある鉄道高等学校で学び、そして今の会社に就職して4年になります。高校では、片道2時間30分の電車通学でしたが、剣道部で副部長として頑張ることができましたし、各地から通う仲間とともに充実した時間でした。

職場では、電車の遅延やお客様からのクレーム対応など大変なこともあります。さらに勤務駅が小規模なため人員が限られていることから、ほとんどの業務を自分の判断と責任で進めなくてはなりません。それでも、少しずつ仕事の面白さを知り、今では充実した日々を送っています。幼い頃、プラレールで遊んだ時に抱いた思いが、そのまま現実になったようで不思議ですね。今後は乗務員になることが目標です。順調に行っても最短であと5年ばかりですが、地道に勉強しながら頑張っていくつもりです。

休日の楽しみは、高校時代や職場の仲間との野球ですね。大好きな日本ハムの応援に都内の球場で観戦したり、千葉・船橋のグラウンドを借りて草野球を楽しんだりしています。目標であった高校への進学も就職も、そして最近の休日の楽しみも、群馬県という東京圏へのアクセスの良さがあったからできたことだと思っています。そして中学、高校、現在の職場と、それぞれの場面で親身に支えてくれた人がいたことに感謝しています。11年前、偶然この土地に避難したのですが、ここに来たからこそ様々なことが実現できたのだとふり返っています。

成人式は群馬での式に参加しました。浪江町の成人式は、町の広報で見ました。掲載されていた写真から懐かしい同級生の顔を見ることができました。浪江町の復興の様子は、家族が撮ってきてくれた写真などで知ることがあります。私の住んでいた上ノ原の団地があった所は、今は更地になり、近くの公園も遊具は錆びて、雑草が生い茂っている状態でした。町の中心部は道の駅などの整備が進んでいるようですが、町の周辺部のさびしい様子には少し残念な気持ちになります。私にとっての浪江は、震災当時の小学5年生の記憶のままで止まっています。でも、もう現在の浪江にその面影を感じることは難しいです。私の家族も、以前は浪江町に帰るときにはワクワクしたというけれど、新しい土地にも長く暮らして慣れ親しみ、さらに大きく変わってしまった浪江の姿からは複雑な心境になると言います。残念ではありますが、これも仕方ないことだと思えます。それでも浪江への思いは大切にしていきたいです。私自身、これまで同様に前を向いて元気に頑張っています。



宮崎県

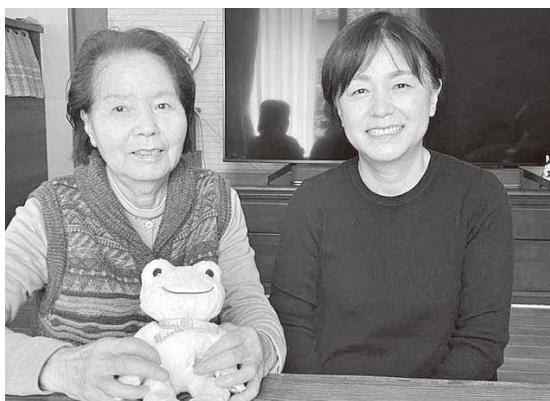
佐藤 啓子さん(棚塩)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：2022年3月2日

「ただいま」といえる日まで・・・

2014年の初回取材時、お父様（忠夫さん）が「毎日、浪江のころ通信を暗記するほど読んでよ」とおっしゃいました。それは、故郷への深い想いや帰還の前に立ちはだかる諸々の課題の複雑さを含んだ言葉でした。遠い宮崎の地で暮らす佐藤家の皆さんにとって、その大切な「ころ通信」が今年度で終了と知り、啓子さんが「なかなか再会がかなわない懐かしい皆さんへの近況報告と故郷への手紙」という思いでペンをとっていただきました。



▲啓子さん、お母様（陽子さん）、そして「僕と思つて」と光琉さんが贈ってくださったお人形

◆浪江への想い
浪江も少しずつ復興が進み、景色もずいぶん変わって聞いています。父も母も私も子どもたちも通った幾世橋小学校も、取り壊さ

◆あれから11年
震災から11回目の春。桜が咲くこの季節は、11年前のあの日起こったことや浪江の桜の景色を思い出しては寂しい気もちになる季節です。この11年は、見知らぬ土地で、年老いていく両親の生活のこと、4人の子どもたちを何とか成長させることだけに走り続けてきた日々でした。振り返ると短く感じる一方、遠くなっていく故郷を思う毎日、長くも感じる年月でもありました。当時は今後の生活のことを考えるために、宮崎に住む私の姉を頼り、ほんの少し身を寄せるつもりでしたが、子どもたちの学校のことや夫婦の仕事のことがあり、気がつけばもう11年が経ってしまいました。

2018年のころ通信取材時には高校生だった息子・光琉も、もう大学4年生。進みたい道を見つけ、ただ今、就活真っ最中です。震災当時は小学4年生。あれ以来一度も会えなかった同級生や幾世橋DJアースの仲間との再会を楽しみにしていた浪江での成人式も、コロナの流行で参加できずとても残念がついていました。宮崎に来た当時は「浪江に帰りたい」と泣いてばかりいた長女の千春は、東京で雑誌編集の仕事で、二女の光は広島県呉市の社会福祉協議会で福祉の仕事に携わっています。三女のえみるは、東京の病院で救命救急の看護師として頑張っています。宮崎に来たときは、8人家族+1匹の大所帯でしたが、2015年3月11日に父が亡くなり、昨年8月には、震災の浪江を後にした時から、今後の生活に不安を抱える私たち家族をずっと癒してくれた愛犬クーも、13歳で亡くなりました。子どもたちも家を離れた今は、母と私たち夫婦3人暮らしです。

れたそうですね。それでも、私の心の中にある浪江の風景は、震災当時の豊かな自然と温かい人たちが住む浪江のままです。震災後、はじめて浪江に行った時のこと。がれきはまだ残っており、津波で流された自宅付近では、荒涼とした風景が広がるばかり。それでも木々は茂り、花さえ咲いているのを見た時、「誰もいなくなってしまうこの場所、いったい何度、花を咲かせたり、冷たい風に吹かれたいを繰り返したのだろう」と思うと、傷ついた故郷を本当に愛しく思うと同時に、仕方がなかったとはいえ、傷ついた故郷の復興のために何もできなかったことを申し訳なく思ってしまった。私が育った浪江、そして、泣き笑いしながら子どもたちを育てた浪江は、姿を変えてもずっと私たちの故郷です。「ころ通信」は、読むたびに、遠くなる故郷を思い出させてくれました。新たな道で懸命に頑張っている方の記事には、いつも励まされてきました。「浪江に帰りたい」という方の記事には、「まだ寂しいのは、自分だけではないんだ」と慰められもしました。もし、今後浪江に帰れる日（まだあきらめていません）が来たら、これから浪江のために今度こそ何かできれば...と思っています。



古農 満さん(酒井)

取材者：特定非営利活動法人あきたパートナーシップ 高杉

取材日：2022年3月12日

それでも前を向いて進んでいます



日本ナシや水稻を栽培する専業農家を営んでいた古農満さんは、震災当時、長女が秋田市の大学の寮にいたことから、発災4日後の3月15日、浪江町酒井から家族5人で秋田市へ避難してきました。その後、2013年、この「浪江のこころ通信」の第23号で、当時、秋田に暮らす次女の方にインタビューさせていただいたこともあり、今回はお父さんの古農満さんにその後の家族の様子や、これまでの変遷を伺いました。

◆秋田で暮らした5年間
秋田に来た当初は、一時的に娘の寮にお世話になりましたが、これからの生活、二人の高校生への入学や編入のことで、息つく暇もなく、行政機関や高校を訪ねました。幸い、秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」のパソコンがフリーで使えたので、情報入手をするにはずいぶん助かりました。
子どもたちの高校も紆余曲折はあったものの何とか決まり、それぞれが高校生活を謳歌する一方、私自身も、浪江ではナシや米、キウイを育てる農家だったため、秋田でも何か仕事をと考え、大潟村の農家へ繋げてくれる人がいて、春の農作業を手伝うことになりました。6月からは秋田市の知的障がい者施設などの仕事に携わることとなりました。それまでのネットワークでできていた農業関係の人脈にずいぶん助けられましたし、新たな人脈も大事だと考え、いろいろなところに出かけまし

た。秋田で暮らした5年間は、慣れない施設職員という仕事や先の見えない生活、どうしても他の土地で暮らさなくてはならぬ理不尽さに気持ちの整理は大変でしたが、知り合った人にずいぶん良くしていただきました。
◆秋田から宮城へ
秋田に暮らす中でも、以前、浪江の広々とした大地で農業をして暮らしていたころの想いは、いつも心の底にありました。以前から青年団の全国組織に加わっていたこともあり、秋田でも人脈やインターネットを駆使し農地を探していましたが、農業委員会との話し合いも重ね、新規農業就労者として宮城県大衡村で養蜂業を開始するめどができ、構想から2年、秋田に暮らして5年目に転居をしました。浪江町にいたころも趣味で養蜂をしていたこともあり、養蜂に必要な蜜源植物の調査や種まきなどを経て、現在は蜂蜜を製品化し、道の駅みみえでも販売をしています。
◆生きる力、切り開いていく力
自分はずっと農家だったので自然相手に自分で判断して自分で行動することが身につけていたと思います。それが災害時には大事で、とっさの時に誰かの判断を仰ぐのではなく、自分で考えて動かなくてはなりません。日頃から今、災害が起きたら、自分はどうかするかをイメージトレーニングしておくこと、いざという時に役に立つのではないでしょう。東日本震災を知らない世代がますます増えていく

た。秋田で暮らした5年間は、慣れない施設職員という仕事や先の見えない生活、どうしても他の土地で暮らさなくてはならぬ理不尽さに気持ちの整理は大変でしたが、知り合った人にずいぶん良くしていただきました。
◆秋田から宮城へ
秋田に暮らす中でも、以前、浪江の広々とした大地で農業をして暮らしていたころの想いは、いつも心の底にありました。以前から青年団の全国組織に加わっていたこともあり、秋田でも人脈やインターネットを駆使し農地を探していましたが、農業委員会との話し合いも重ね、新規農業就労者として宮城県大衡村で養蜂業を開始するめどができ、構想から2年、秋田に暮らして5年目に転居をしました。浪江町にいたころも趣味で養蜂をしていたこともあり、養蜂に必要な蜜源植物の調査や種まきなどを経て、現在は蜂蜜を製品化し、道の駅みみえでも販売をしています。
◆生きる力、切り開いていく力
自分はずっと農家だったので自然相手に自分で判断して自分で行動することが身につけていたと思います。それが災害時には大事で、とっさの時に誰かの判断を仰ぐのではなく、自分で考えて動かなくてはなりません。日頃から今、災害が起きたら、自分はどうかするかをイメージトレーニングしておくこと、いざという時に役に立つのではないでしょう。東日本震災を知らない世代がますます増えていく

●インタビュー後に 林 律子さん(幾世橋)と再会!

ここまで話をお聞きしていたところ、同じ浪江町の請戸出身、秋田在住の林律子さんが、古農さんに会いたいとインタビュー会場の遊学舎に顔を出してくださいました。林さんは発災直後から現在まで秋田にお住まいですが、古農さんとは浪江にいたころからの知り合いで、それが偶然、避難先が同じ秋田だったためそこでめぐり逢い、不安定な避難先の生活の間も連絡を取り合っていました。

この日のインタビュー後も、避難生活中の苦勞、理不尽な出来事への想いなど、そしてふるさと浪江のことなど共通の話題で話は尽きませんでした。林さんも、「この道はもう戻れない。だったら先に進むしかない。時間が止まっているのではなく、自分が止まっていたのだと気づいた」と語り、古農さんも深く頷いていました。



中で、どう伝えていったらいいのか。東北では自治体の避難訓練などを3月11日に行っているところもあります。次世代に伝えるという意味ではとても良い取組みだと思います。どんな時も罹災証明書が手放せない私たちですが、秋田に住んでいても宮城に住んでいても、自分の人生ですから前を向いて進んでいくしかありません。今は今でも結婚したり仕事に燃えていたりと、自分の人生を歩んでいきますからね。



福島県

柴孝一さん・タケ子さん(請戸)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：2022年3月24日

覚悟を決めての工場再建



▲柴さんご夫婦

請戸で息子の強さんと一緒に、水産加工会社を再建した柴孝一さんご夫婦、仕事への誇りと町への思いの強さを感じました。

◆避難先の千葉での暮らし

千葉での最初の避難先は、3LDKのマンションの1室に、小中学生だった3人の孫たちを含め、私の姉、親子三世代8人が一緒に暮らす生活でした。請戸の水産加工工場は、土台を残して根こそぎ津波にさらわれ、再建することは無理、千葉で長く暮らすことになるだろうと思っていました。そうした思いもあり、数か月後、散歩の途中で見つけた建売住宅を購入、私たち夫婦と姉の3人が転居、息子たち家族とわかれて、暮らすことになりました。

千葉に避難し3年ほど経ったころ、浪江町の漁業関係者による「復興」に向けた視察があり、参加しました。視察先は、東京の築地市場、現在は豊洲に移転していますが、その当時は、近海もの、マグロ、たこ、しらす等、魚種ごとに6か所のセリ市場があり、にぎわっていました。市場の人に「請戸の柴水産の鮮魚はトップ引き(一番高い値段での取引)だった」と声を掛けられ、それまで諦めていた会社再建への思いが強くなりました。震災後も漁を続け

ていた浪江周辺の漁師仲間たちからも、再建してほしい、との強い依頼もあり覚悟を決めました。その後、馬場前町長のところに挨拶に行った時には、とても喜んでくれて、再建を決めて良かったと思つたものでした。

◆再建に向けて

再建を決めてからの道は平坦ではありませんでした。国や県の補助があっても、自己資金は必要です。すべてを流され、負債を抱えてのマイナスからの再出発です。工場が稼働したのは今から3年前、工場再開が2020年4月、「やる」と決めてから約6年かかりました。我ながら、よくやったと思います。今では、平目やスズキといった活魚やしらすやシラウオの加工品等を豊洲市場をはじめ関東圏に出荷し、質が良いとの評価を得ています。

工場の再建とあわせて、自宅の建設も進めました。まだ、浪江町は避難指示が解除になってない頃でしたから、隣町の南相馬市原ノ町に土地を確保し、家を建てました。同じ敷地内には、小さな加工場を作り、佃煮や「食べるラー油」などの加工品を製造、昨年の7月から工場に隣接の直売所や道の駅などで販売しています。工場や直売所に、県外から観光バスで来てくれる人たちもいます。昨年のお盆には、大平山霊園に墓参りに来た人たちが立ち寄ってくれて、あいさつで大忙し、久しぶ

りに、話ができてほんとに嬉しかったです。

◆浪江町の復興

浪江での漁は試験操業が続いていて、請戸でのセリは週に2回、震災前に30名いた仲間人も今は、うちだけ、セリの時には相馬原釜やいわきから、仲間人がやってきます。本格操業になれば、毎日セリが立って、浪江の仲買人も増えると思うけれど、補償のこと、原発の処理水のこと等もあって難しい状況です。調整しながらやっていくしかないと思っています。

震災から11年、浪江に戻った人は約1割、町民の多くは避難先で生活基盤ができています。仕事がないと町に戻って来ることができない、帰って来られない理由はそれぞれ他にもあると思うのです。遠くにいる、町のことを思い、復興を願ってくればイイと思うのです。これから、私は自分のできることを積み上げていきたいと思っています。



▲道の駅なみえの販売コーナーと「請戸産釜揚げしらす丼」



千葉県

添田 隆幸さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋・石井
取材日：2022年4月21日

お互いを認め合い、笑顔で暮らしたら



▲添田隆幸さんと次男の哲平さん



▲響堂ホール・添田音楽教室

浪江町で音楽教室を開いていた添田さんご夫婦、現在は、息子さんやお義母さまと一緒に東京都世田谷区経堂で、音楽教室とコンサートホールを運営されています。

◆義父の病気と避難

義父の入院治療のために、震災2年前まで義父母が住んでいた世田谷区経堂に避難しました。震災時、義父は南相馬市の病院に入院していましたが、医師や看護師が不足し、薬品もないので転院してほしいとの連絡がありました。転院先が見つからない中で、退院、病人を抱えて南相馬市から米沢市を経て経堂まで避難しましたが、今思っても、本当に大変でした。義父は、避難移動の間、適切な投薬も受けられず多剤耐性緑膿菌（感染症）に罹患しました。受け入れられた経堂の病院も救急病院だったので、3カ月で退院しなければなりません。転院先を探したのですが治療ができる適切な病院が見つからず、訪問介護を受けながら2年間ほど自宅で介護しました。

◆ピアノ教室の再開

震災で無くしたものはたくさんあります。相馬の私の実家は津波で流され、両親は無事でしたが親戚6人が亡くなっています。音楽教室を兼ねていた権現堂の自宅は解体、5台あったピアノを持ち出すことはできませんでした。避難先の経堂でピアノ教室を再開する時は、妻が所属している全日本ピアノ指導者協会の会員の先生方がピアノを譲ってくださいました。最初は、避難先でのマンションで始めたピアノ教室ですが、8年前に近所に売地を見つけ、亡くなった義父の遺産等をもとに教室を兼ねた自宅を建てました。加えて6年前には、自宅から5分ほどの所に新たな売地を見つけ、小さなコンサートホールも建てました。グラウンドピアノを2台設置した音響が素晴らしいホールとして演奏会の場として活用されています。すし、息子の哲平の音楽教室として使用しています。

◆人との縁、タイムングを大事に

妻の満江は、高い指導力が評価されています。幼児や小学生のピアノ指導とあわせて、河合出版から指導法についてのテキストを出版しています。世田谷区民合唱団の副団長も務

めていて、毎日忙しくしています。私は義父が亡くなった後、時間の余裕ができたので「シニアタレント募集」に応募、事務所所属し、時々テレビ出演もしています。最近では、寝具のCMに出演することが多く、夫婦で出演することも間々あります。震災前も今も、こうした機会があれば、あしななければというのではなく、良い意味で成り行きに任せてきました。人との縁、タイムングがあって今があると思います。

◆お互いを認め合い、笑顔で暮らしたら

私が一番大切にしているのは、気功と整体です。20年来、気功に取り組んできましたが、9年前に整体師の資格も取りました。今は、ケガや体の不調、がんや難病で悩んでいる人など様々な人に依頼され施術しています。施術代の設定はしていませんが、寄付をお願いし、毎月ユニセフに寄付しています。困った人の役に立てるとするのは、私自身の励みにもなります。浪江町が震災前の姿に戻るのには難しいと思います。どこにいても、お互いを認め合い、笑顔で暮らせたらと思います。音楽教室に来る子どもたちの笑い声が私の元気の源です。私は、気功や整体を通して多くの人を元気づけられたと思っています。どうぞお気軽に声をおかけください。たくさんさんの笑顔の出会いを楽しみに、お待ちしております。